

景気動向指数研究会 議事概要

1. 日時：平成23年10月19日（水）12：30～14：30
2. 場所：共用第4特別会議室（中央合同庁舎第4号館）
3. 出席者：
（委員）
吉川 洋座長、刈屋武昭委員、小峰隆夫委員、嶋中雄二委員、樋 浩一委員、
福田慎一委員、美添泰人委員
（事務局）
小野善康経済社会総合研究所長、堀田 繁同次長、
道上浩也同総括政策研究官、小野 稔同総務部長、増島 稔同景気統計部長
4. 主要課題：
（1）景気動向指数の改定及び第14循環の景気基準日付の確定について
（2） その他
5. 議事進行：
○ 開会
事務局より、論点メモ（資料1）と参考図表集（資料2、資料3）に基づき、景気動向指数の改定及び第14循環の景気基準日付の確定について説明があり、その後、意見交換を行った。

研究会において呈せられた主な意見・議論は以下の通り。

○ 景気動向指数の改定について
・ 今回の改定は、これまでと異なり、パフォーマンスの優劣よりも、経済理論的な整合性を確保することに比重をおいている。改定後のパフォーマンスについても、著しい劣化は見られないことから、一つの前進であると言えよう。
・ 今回の改定について、色々検討はされたようだが、改善を要する点は存在する。例えば、四半期データを月次化している系列があるが、速報性すら満たさないことから、月次系列を検討すべき。また、遅行指数の系列数が、先行指数、一致指数と比較して、少ないのは問題。特に、遅行指数の改善を図るべきである。

○ 景気基準日付の判定方法について
・ 毎月の判断はC Iで行われていることから、ヒストリカルD I（HDI）による景気基準日付とC Iのピークが8ヶ月ずれていることは認識しておいた方がよい。HDIを用

いた決定方法に異存はないが、参考として、C I のピークも見ておく必要はあるのではないか。

- ・ 景気基準日付は、HDI を基準として決められたものについて、「波及度」等の観点から検討し、他指標の推移を見つつ、判断をするべき。今回、HDI によるものとC I によるものが乖離した理由は、「山」周辺の動きが高原状態であったためであろうし、その乖離幅は許容できる範囲ではないか。
- ・ 今回の決定について問題はないと思うが、将来においてCI の基調判断とHDI の矛盾が生じうる可能性もあり検討の必要性を認識しておいた方がよい。
- ・ 今回のように、「暫定的な山」の時点を特定化した後、採用系列改定を行い、その後「山と谷を確定」すると、暫定的な山の時点がずれることになる。改定のタイミングを今後考慮する必要がある。
- ・ 系列の改定は、経済構造の変化に伴い、その実態を適切に反映することが困難になったために行われるものである。このことから、改定後の系列で、過去の日付を遡及し直すことは、当時の経済構造とは異なる系列で見直してしまうことになるのではないか。

○その他について

- ・ 第14 循環の「山」が、暫定時から確定時でずれたのは、生産系列の変動によるものであり、それは、公表元が行っている季節調整法に何かしら改善すべき点があるためであろう。
- ・ 現状、HDI が平成23年2月で50%割れしているが、その後の推移は40%近辺で、「波及度」「量的変化」「期間」の観点からみて、景気後退局面には当てはまらない。また、「直近月の6ヶ月以内では転換点を付けない」とのルールから、現時点では下降の判断となっている系列が複数あるため、後で50%超に修正される公算もある。
- ・ 自動車は生産計画が強く、エコカー減税の期限等を鑑みれば、今後震災前の2月を超えていくこともあり得るし、米国景気の反発の可能性や補正予算の効果もあり、後で振り返れば、最近までの状況は軽い踊り場の局面ということになるかも知れない。
- ・ 震災前の2月の水準を上回らない一方で、4月の水準も下回らない状況が続いた場合、次期循環の山谷をどう判断していくべきなのか、検討を要するのではないか。

第14 循環の景気基準日付の確定及び景気動向指数の改定について

- ・ 景気動向指数研究会として、景気動向指数を改定し、第14 循環について、2008（平成20）年2月を景気の山に、2009（平成21）年3月を景気の谷とすることに同意が得られた。

以上を踏まえて、内閣府として、第14 循環の景気の山を2008（平成20）年2月に、谷を2009（平成21）年3月に確定することとした。

（以上）